第 25 回「哲書会系読書会(仮)」2023 年 6 月 20 日（火）　@北区民センター
バタイユ『エロティシズム』1957 年（酒井健訳・ちくま文芸文庫　2004）
報告者：ハマ

第 2 部　エロティシズムに関する諸論文

第一論文　キンゼイ報告、悪党と労働

アメリカの性科学者・昆虫学者であるアルフレッド・キンゼイ

1948 年に発表された『Sexual Behavior in the Human Male』（邦題：『人間における男性の性行為』）

1953 年に発表された『Sexual Behavior in the Human Female』（邦題：『人間女性における性行動』）から成る。

（★は本文とは別に補足したもの）

–

■エロティシズムは、私たちが外側から一個の物ように評価できない体験である

このような（キンゼイ報告）機械的な調査がおこなわれる以前には、性の事実は物のように提示されることはなかった。性活動を物のように語ることがとうとう可能になった。

最初の反応、かくも奇妙な物への還元に対する異議申し立て。

生殖活動を外側から観察することに反対する理由は、因習的なものばかりでない（宗教界・保守からの批判）

伝染的な特徴がそのような観測の可能性を排除している。（p.258）

性の活動は（欠伸や笑いと同じように）は目撃者を融即の状態へ巻き込む。科学の系統的な観察を排除する。

機械的な分類と内面的な真実とのあいだの不一致　＜性の身の上話＞

彼らが報告している事実がどのような深淵の上に位置しているかを知ったのである。

客観的な観察（幼児の自慰行為をストップウォッチで計測）

とうてい不快感なしには、この重大ものを俗なる圏域（物の圏域）の通俗さへ移行させることができない。

■労働は、私たちの内部で意識に、そして物の客観性に関係している。労働は性の横溢を制限する。

宗教的な実践は性活動にブレーキをかけている。（プロテスタントとカトリック）　(p.264)

頻度、悪党（アンダーワールドの住人）だけが 49.4%

この要因は労働。労働によって、人間は物の世界を秩序づけている。

物に還元できない完全に内面的な性衝動を排除している世界

＜動物性＞、あるいは性の横溢は、私たちの内部において、私たちが物に還元されえないようにしているもの

＜人間性＞は逆に、労働の時間におけるその特有な面からすると、性の横溢を犠牲にして、私たちを物にしてしまう傾向を持つ。

（p268）

■性の横溢に対立する労働は、物のへの意識の条件である。

支配者階級は、他の労働者階級のもつ余剰エネルギーよりも多い余剰エネルギーをもっている。

この階級が他の階級よりも人間化している事実と釣り合っている。（p270）

人間性のなかには、物と労働に還元しえない何かの要素、つまり人間は結局のところ動物よりも（★精神面において）奴隷化するのが困難であるといった要素があるにちがいないという保留。

支配者階級(★横溢の役割)は、一般に、自分自身の階級において人間性を物への還元から解放する役目を持つ。人間が自由になる瞬間へ人間を、この階級において高めてゆく役割を持つ。

私たちが人間的な世界と呼んでいるものは、必然的に労働の世界、つまり物への還元の世界なのである。

労働は、その語源が明らかにしているような苦痛とか拷問台とは別の意味を持っている。

労働は意識への道でもある。この道を通って人間は（物としての）動物性から脱した。事物への明晰判明な意識（対象行為）が私たちに生じたのは労働によってであった。

性の横溢は、私たちを意識から遠ざける。自由に溢れ出る性欲は労働の能力を減退させる。

労働は性の渇望を減退させる。厳しい不一致。

労働と意識によって自分を規定している限り、性の過剰を、無視したりときには自分の内部で呪うことまで。

このような無視は、人間を、世界への認識と自己への無知に同時にかりたてたのである。

■物への意識に対立するエロティシズムへの意識は、その呪われた面で露わになる。すなわちこの意識は、沈黙した覚醒へ通じている。

性生活への呪詛、無視がもとになって、意識は私たちに与えられる。

遠ざけられるのはエロティシズムだけでない。内部で、物の単純さに還元しえないすべてのもの対して、私たちは直接的な意識を持てない。

私たちの内的体験の諸真実が私たちに捉えがたいということを一般に認めねばならない。

内面性に達するためには、私たちはおそらく、内面性が物とみなされる物の迂回路を通ってゆくことができるだろうし、その必要さえある。

私たちの内奥の体験は、直接的に、意識の明晰な部分へ入ってゆくことはできない。

呪われ断罪された可能性の形式において―＜罪＞という形式において―内面の真実は意識に達するのである。

意識はしたがって性生活を前にした恐怖と嫌悪の動きを保持している。

方法的な認識の明晰性は極めて貴重であって、人間はそれによって物の主人になる力を得ている。

この明晰性は、実生活上の諸目的のために、真実の一部を捨て去らねばならない。

この明晰性は十全なる意味を持っているといえるだろうか。

自分が引き裂かれてゆく無秩序のなかで、少なくともこの無秩序を識別することはできるし、そのようにして、物を超えて、引き裂かれていることの内的な真実に意を注ぐことはできる。

第二論文　サドの至高者

理性を逃れる人々、悪党、王

至高で絶対的な自由は―文学の世界においては―王権の原理が革命によって否定されたあとで考察された。

監獄の孤独と、想像上の過剰（エクセ）の瞬間の恐るべき真理

エロティシズムと＜無感動＞のひどい無秩序

死と苦悩の勝利

第三論文　サドと正常な人間

快楽、それは逆説だ

サドを称えれば、サドの思想を緩和することになる

神的なものは悪徳と同じほど逆説的である。

正常な人間は、神的なものの逆説、エロティシズムの逆説を病的とみなす

悪徳は人間の深い真実であり、人間の心である。

人間の生の二つの極限的な様相

暴力は沈黙し、サドの言葉は逆説である

サドの言葉は犠牲者の言葉である

サドは、自分自身の見方で、他者を前にした自己正当化をおこなうために語った

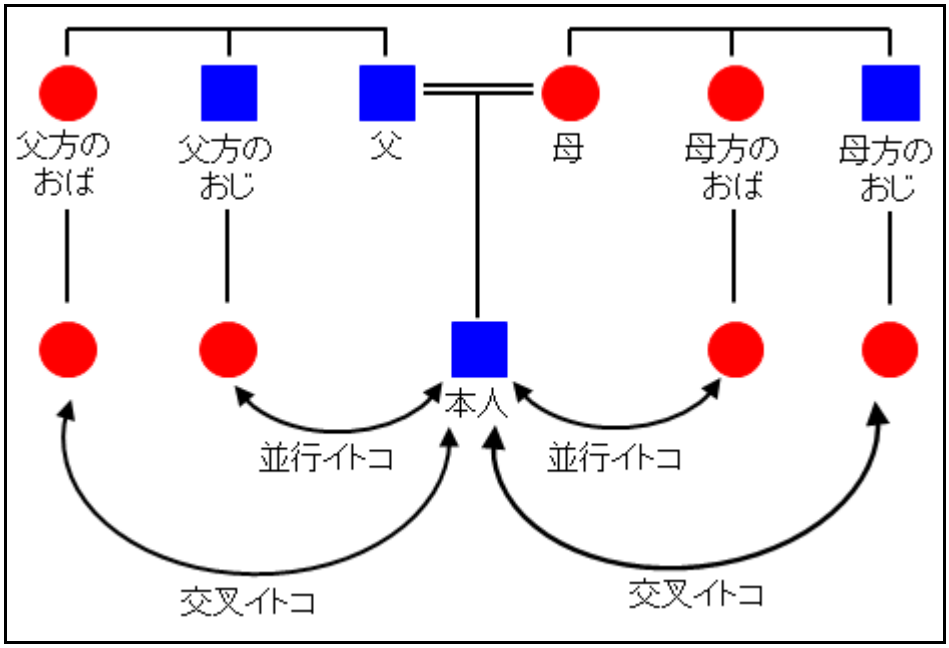
サドに言葉は私たちを暴力から遠ざける

サドは、暴力をよりいっそう享楽するために、暴力のなかに意識の冷静さと節度を持ち込もうと努力していた

サドの倒錯という迂回路を経て、暴力は最終的に意識へ入ってくる

第四論文　近親婚の謎

『親族の基本構造』1948 年　レヴィ=ストロース



親族関係に応じて、この二人は結婚できないが、あの二人は結婚できるということであり

あるいとこの関係が、しばしば他のいかなる結婚関係をも排するほどに特権化された指標になっていることである。

非近代的な民族においては、諸個人は明瞭判然たるカテゴリーに分類されていて、それぞれのカテゴリーに応じて性の関係が禁止されたり推奨されたりしている。

■二つの明瞭に異なった状況

１）明確な形態の血縁関係が結婚の可能性と非合法性を決定する規則の根底に横たわっている

２）＜複雑な構造＞の状況、そこでは配偶者の決定は＜他の経済的、あるいは心理的メカニズム＞にゆだねている。

結婚に関する＜禁止＞だけを分離させて考察することはできず、＜禁止＞の研究はこの＜禁止＞を補完している結婚に関わる＜特権＞の研究と切り離すことができない。

■近親相姦の謎に対して次々に出された解答（ｐ. 338）

レヴィ=ストロース　「近親婚の禁止は根本的な一歩であり、そのおかげで、＜自然＞から＜文化＞への移行は完全に達成されるのである」

私たち人間の本性のすべてはまさしく禁止の決定にかかっている

人間を人間自身に明示したい、そうして世界の可能性を引き受けたいという欲望を認識に結びつけようとする野心。

近親婚の禁止に優生学的な処置という意味を与えている。近代にはいってから

「16 世紀以前にはこの見解はどの地にも現れていなかった」（レヴィ=ストロース）

現在もこの信仰は根強く存在している。

「本能的な嫌悪」　近親相姦関係への普遍的な強迫観念（オブセッション）

外婚制という制度、捕獲が妻を得る正常な手段であった戦士部族の習慣の固定化に源がある。

その氏族の男性メンバーにとって、その氏族の血が、したがって女たちの経血がタブー扱いされていたことに源がある。

■フロイトの精神分析学の仮説

父親は女たちを自分の専有物として確保しておくために、この禁止を息子兄弟たちに課した。

■禁止された結婚と合法的な結婚とのあいだの明瞭な区分には限定された意味しかない（ｐ.342）

未開の人々が編み出した多種多様な男女の組み合わせ。彼らは女の配分という問題を解決するためにそうした

この不条理で気まぐれな錯綜に入らざるをえない。

エロティシズムの意味を理解困難にして不明瞭さから抜け出るということ。

並行いとこ：兄弟、姉妹と呼び合う平行いとこのグループ。結婚の禁止（近親婚）

交叉いとこ：特別な呼称で呼び合い、結婚で結ばれる、推奨さえする

父系交叉いとこに対して母系交叉いとこが特権を持つ

父の姉妹の娘（父系交叉いとこ）との結婚が推奨され、母の兄弟の娘（母系交叉いとこ）との結婚は禁じられている。

他方、別な社会ではこれと反対のことが起きている。

禁止に関係している人々の特性のなかに―すなわち道徳上の振る舞いという意味での彼ら個々の状況のなかに、あるいは彼ら相互の関係のなかに、この関係の性格のなかに―彼らに向けられた禁止の理由を探し出そうとする。この特性が恣意的であるために私たちは禁止それ自体の探求の道からそれてしまう。

害して重要でない区別が、それにもかかわらず重大な結果をもたらしている。

レヴィ=ストロースは、女の配分のための交換体系が役割として働いている。

女の獲得の価値は聖なる性格され帯びていた。女たち全体から成り立っている富を配分することはまさに死活の問題をいくつも生じさせていたのであり、これには規則（近親婚の禁止）で対応しなければならなかった。

交換の制度だけが、女を必要としている男たちのあいだに公平に女たちを分配することができたのである。

■外婚制の規則、女たちを贈与すること、女たちを男たちに分配するための規則が必要だということ (p. 348)

レヴィ=ストロースは、結婚という一つの制度の構造を、非近代的民族を動かしている交換の体系の全体的な運動のなかに置き入れている。

マルセル・モースの『贈与論』

１）未開社会、交換が取引というよりむしろ相互の贈与の様相を呈している。

２）相互の贈与は私たちの社会よりも未開社会においていての方が重要な位置を占めている。

３）交換―＜全体的社会事象＞、社会的、宗教的、呪術的かつ経済的、功利的かつ感情的、法的かつ道徳的な事態に直面させる

この種の交換はいつも儀式的な性格

シャンパン酒―この種の財の本質は祝祭の本質

自分の娘と結婚する父親、自分の姉妹と結婚する兄弟

父親は娘という富、兄弟は姉妹という富を、贈り物として贈与すべきなのだ。

「この受益者は、さらに豪華な贈与物を返礼の返礼として受け取る権利を得るのである」

純然たる破壊は明らかに大きな威光を他の人々に押し付ける。

有益な労働の破壊（資本主義とは反対の現象）

交換による結婚―営利主義的精神に反する特徴を強調する必要。

売買婚

これら未開社会の結婚の形態は、女たちを商取引や打算の次元に貶めているのではなく、祝祭の次元に位置づけている。

未開社会における結婚、「社会的価値の表象としてではなく、自然の刺激物として」現れる

女たち、流出という意味でのコミュニケーション

私が自分の娘を贈与するならば、私は自分の息子のために別の女を贈与として受け取ることになる。

近親婚の禁止において否定される事柄は、ある肯定の結果にほかならない。

自分の姉妹を贈与する兄弟は、自分の近親の女との性的結合の価値を否定しているというよりは、むしろ、この女を他の男と結びつけ、また彼ら自身を他の女と結びつける結婚のより大きな価値を肯定している。

性の関係は、それ自体、交流であり運動である。それは祝祭の本性を持っている。

それが本質的に交流であるからこそ、この性の関係は最初から、日常の外へ出るという運動を惹き起こそうとしている。

■贈与による交換における、ある種の親族関係の事実上の利益（p. 353）

レヴィ=ストロースが強調しているのは、女の価値、つまり女の物質的な有益性というまったく異なった面なのだ。

交換体系の運動を根源的に律している情念の戯れにおいては、そう（女の物質的な有益性は二義的）と思う。

親族の諸形態のあいだから特定の形態があえて選ばれているその選択の意味、理由（を見つけ出す仕事）

レヴィ=ストロースは自分の仮説に強固な基盤を与えようとし、交換のなかで最も確実な面、有益性という面に依拠することが適切だと判断した。

女の価値の魅惑的な面の反対側に、この女の有益な面は存在している。この二つの面の明白な対立、矛盾について

経済的欲求の実現が夫婦共同の生活と性差による労働の分業に全面的に基づいている人間集団・・・規則的な食料生産は・・・夫婦生活が構成する真の“生産協同体”に基づいている。

若い男は結婚しなければならない。一個の社会が女の交換をうまく営むころができなければ、その社会は実際に無秩序にみまわれてしまう。

「私が、他の男に所有されることになる女との交わりを自らに禁じたときから、どこかには、私に所有されることになる女を断念している男がいるということになる」

フレイザー「交叉いとことのあいだの結婚が、氏族間の結婚を目的にした姉妹の交換から生じていること、それもまったく単純から直接的な仕方で、ごく自然な脈絡において生じている」

平行いとこのあいだの結婚においてはその集団は女を失うこともなければ獲得することもない。

それに対して交叉いとこのあいだの結婚は集団間における女の交換を実現させる。

平行いとこと交叉いとこのあいだの相違の神秘は、交換を優遇する解決と、停滞が優越する傾向にある解決との相違に帰着する。

レヴィ=ストロース「・・・不可避的な相互性の巨大な輪舞、円環ができあがるためには、一個の人間集団が母親の兄弟の娘との結婚を掟として制定するだけで十分である。

父親の姉妹の娘との毛っ子は、婚姻による交換の連鎖を拡大することができない。

このためこの結婚は、交換への欲求につきものの目的、婚姻関係の拡大と権力の拡大を、生き生きと実現することができないのだ」

■レヴィ＝ストロース理論に経済的な面に副次的な意味（p. 359）

女の交換―贈与、男の利害心をかきたて、他方無益な気前の良さに立脚している。

＜交換―贈与＞の二面性、ポトラッチという制度の二面性に対応している。

レヴィ=ストロースは女たちのポトラッチとエロティシズムの本性との関係をほとんど強調していない。

結婚はエロティシズムの対立物のように見える。

エロティシズムの条件＝規則が障害と障害の解除（侵犯）を体制として秩序づけたときに、生み出された。

家庭の物質的な建設だけしか目的にしていなかったなら、これほど厳密に形成されただろうか（近親婚の禁止）

規則のうちに内面の関係の戯れが考慮

近親者を断念するという反自然的な運動を、どう説明できるか、それは想像を絶する異常な運動であり、一種の内的な革命であったのだった。

この反自然的な運動、性的渇望の対象を贈与するという逆説の根源

禁止の対象は、禁止されるという事実それ自体によって渇望の的になったのでは

このことによって人間と動物のあいだの相違は生じている。

このような相互的な運動がエロティシズムの本質。

近親婚の禁止に関係した交換の規則の原理でもあるように思える。

結婚とエロティシズムは多くの場合対立している。

今ではこの規則は、富の配分という有益な意味しか持たなくなっている、女は、子供の出産力と労働力という狭い意味しか持たなくなった。

■レヴィ=ストロースの解釈は、動物から人間への移行という問題の特殊な一面しか提示していない。この問題は、全体的に考察されねばならない。

レヴィ=ストロースの教説の本質は、交換活動にある。

生の全体が賭けられている＜全体的社会事象＞にこの本質はある。

第一に重要なのは近親婚の規則、経済活動を基底とする歴史の動因ではない。

すこし離れたところから眺めて、全体を再構成してゆくことだ。

孤立した一つの面（内面の関係の戯れ）が含まれる全体的な面については素描程度に留めている。

これはおそらく哲学への怖れのせいなのだ。

客観的な学問・科学は対象を孤立化させ、その孤立した眺めを抽出する。その限界の内では

自然から文化への移行という問題と取り組むことは困難

動物性ではなく自然について、人間ではなく文化について語るという姿勢、そのような論述は、

人間存在の全体が変化のなかに賭けられている重要な瞬間を排除することなのである（？？）

人間存在一般の生成とは、人間が、引き裂かれた人間存在の全体を見せるような引き裂かれ方をしながら、なおかつ動物性と対立してゆこうとするときに現れる事態のことである。（？？？）

■人間の特性(p. 364)

労働の出現、禁止（経血、排泄物などなど）。嫌悪感や克服しがたい嘔吐感、動物と人間の対立を際立たせている。

人間は、自然の与件を単純に受け容れない動物、自然の与件を否定する動物だという事実である。

道具と生産物は、一つの世界を、つまり人間の世界を作り上げている。

人間は自分自身を否定し、自分を教育する。

人間が与件の世界に加えている否定と、自分の動物性に加えている否定とは、関係しあっている。

教育は労働の結果か、労働は精神的変化の結果か、それは重要ではない。

人間は、本質的に自分の動物的な欲求を否定している。

禁止の普遍性は驚くほど、月経経血のタブー、民族誌学は問題とするが、排泄物への嫌悪は誰も語っていない。

人間の特性、第一の面（禁止）、第二の面（侵犯）、第三の面（死）

動物から人間への移行という着想が原則としてヘーゲルの着想であることを想起するに留めておきたい。（？？）

近親婚が問題となる場合には、猥褻性への平凡な禁止を無視することが妥当とは思えない。

■近親婚の規則の変化しうるということ、および性の禁止の対象が一般に変化しうる特徴を持っているということ(p. 367)

猥褻性から出発して、近親婚を定義

ある人がそれを猥褻と言うならば、それは猥褻なものになる。猥褻さは、一個の物と一個の人間の精神とのあいだの関係。

猥褻さを画定することができるが、何らかの安定性を得ても、そこには恣意的なものが働いている。

生活の必要事との妥協も数多く働いている。近親婚はこのような状況の一つ。

性欲のすべての様相が猥褻になる。場所、状況、人物と同様に変わりうるのであり、いつも恣意的にしか画定されない。

裸体、20 世紀の初頭においては羞恥心を傷つけていいたものが、今日（1957 年）では傷つけていない。

デコルテは、昼間は不作法だが、夜は礼儀にかなっている。

性器が見える裸体、医者の診察室では猥褻ではない。

いっしょに住んでいる人々のあいだの性的交渉を父と母の関係に、夫婦生活に限定している。

この分野においても裸体を問題したときとおなじほどの恣意的な要素を見出す。

生活上の便宜的妥協を見出す。

結婚が許されている親族と禁じられている親族のあいだの境界は恣意的であって、女を交換する回路を確保する必要に応じて変化する。

有用でなくなると、近親婚の範囲も縮小する。やがては無視する。

禁止の一般的な意味は、安定に応じて強固になっていく。禁止の範囲は新たに拡大する。

動物の無秩序に、完成された人類の原則を対立させること。

ヴィクトリア朝時代の英国貴婦人とやや似たところがある。肉体と動物性が存在しないと信じる振りをしていたからだ。

彼らは素朴でありながら、侵しがたく、優しいのに近寄りがたい。

近親婚の禁止、息子に対して母親を、父親に対して娘を守っておく境界が設定されている。

人間の本質は近親婚の禁止のなかに、そしてその帰結である女の贈与になかに示されている　(p371)

結婚は、純粋さと利益、性欲と性欲の禁止、気前の良さと貪欲さを結合させている。

二つの極のうち前者の方の極限＝贈与に位置づけている。

贈与とは、それ自体、断念だということである。

この種の消費を引き起こした断念、禁止よって作り上げられた断念だけが唯一、贈与を可能にしたのだ。

人間の本質は、このような動物的な直接性を乗り越えるというところから現れ出ているのだ。

このように断念したことで、逆に、断念した対象の魅惑的な価値が強調される。

この断念はまた、エロティシズムを完全なるものに仕上げる。

禁止された価値への尊敬がなければエロティシズムは存在しない。

禁止に対する尊敬―暴力が禁じられている世界を秩序づける。

他方でこの尊敬は、暴力が容認されなくなった領域に、突如として暴力が貫入する可能性を開く、

侵犯の瞬間（自由なエロティシズムの瞬間）、他方に性欲が認められていない環境の存在。この二つが現実の両極端を形成している。

このあいだの現実に、中間的な形態が無数にひしめいている。

侵犯は、人に知れない限り容認されている。

本質的に重要なのは、エロティシズムな様相など考えられもしない環境が存在している。

その余波としてエロティシズムが転覆行為の価値を帯びている侵犯の瞬間である。

結婚における贈与の部分は、祝祭の喧騒に関係している侵犯の面を際立たせている。

この侵犯の面はもはや確実にぼやけてしまった。

今や結婚は、性行為と、禁止への尊敬との妥協の産物になっている。

結婚とは原則として侵犯なのである。しかし母や姉妹の世界が夫婦生活を窒息させていった。

（家庭にはエロティシズムがなくなった）

過剰な生殖活動を中性化させていった。

禁止が作り上げる純潔は、母となった妻の方へ、ゆっくりと、部分的に移っていった。

こうして、状態としての結婚が、人間的な生活を続行する可能性を確保していったのだ。

動物的欲求の自由な満足に対置された禁止を尊敬しながら、そうしていったのである。

第五論文　神秘主義と肉欲

キリスト教の現代的な視野の広さから＜性的なものへの恐怖＞へ

性の聖なる性格と神秘的生のいわゆる性的な特徴

死によって自己と決別することを求める道徳、およびこの道徳の一般共通の道徳との相違

＜女王バチの婚姻飛行＞と修道士の生における現在時の瞬間と死

修道士の受ける誘惑、および性的な罪を想像して味わう快楽

罪ある肉欲、そして死

性欲、愛情、性愛

悪党、性的破廉恥、猥褻さ

神秘体験とエロティシズムの一致

禁欲、および無条件的瞬間の条件

第六論文　神聖さ、エロティシズム、孤独
第七論文　『マダム・エドワルダ』序文
結論